ラスト・ラブ

澄田　康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラスト・ラブ

【Ｎコード】
Ｎ０９１１Ｏ

【作者名】
澄田　康美

【あらすじ】
武装勢力を率いる若い女性レイブン、ムーム。しかし彼女は、相棒の彼にいつしか恋をしてしまっていた。

（前書き）

前書き

この話は、ある人からインスピレーションを貰った為に、ついやっちゃった話です。

ついでにその人っぽい書き方しちゃいます。なので今までの澄田の小説とは違う、新鮮な感じがするかもしれません。

初めての人は、ゆっくりとお楽しみくださいませ。

では、どうぞ。

最初会った時は
ただのいけすかない奴だと思ってた
見た目からして犯罪者って顔をしてた
ここまで来ると
むしろ笑えてしまう
たまたま襲った敵のトレーラーに彼はいた
私の方から
彼を誘ってみたんだ
選択の余地がないようなものだから
彼はしぶしぶと言った様子で誘いに乗った
それからの私と彼は
コンビで戦い抜いていった
彼がいる事で
部隊の子の損傷はかなり減っていった
私はレイブンとしての彼の腕を信頼していった
それでも
いつか誰かが死ぬのは仕方のない事だった
ある日
私の傍によくいてくれていた子が
矢面で撃墜されてしまった
その戦い自体は何とか勝った
それでも
死んだあの子は帰ってこない
私はあの子を弔った場所に
じっと座り込んだ
うずくまり
ぼーっとしながら

自然と涙が出ていた
自分の情けなさが
嫌になった
それでもっと涙が出た
あの子を死なせて
割り切れない自分がいた
それでもっともっと涙が出た
声に出して泣き出しそうになった時
後ろから私の涙をそっと拭ってきた奴がいた
彼だ
こんな事なんてしそうにない人だった
でも確かに彼だった
見間違えるはずがない
こんな顔してるのは
彼しかいないのだから
私の涙を拭った後で
彼は照れくさそうな調子で
言い訳をしてきた

「あ、すまない・・・君のそんな姿を見ていたら、つい・・・」

犯罪者みたいな顔は
どんどん真っ赤になっていった
気がついたら
私は彼に抱きついていた
ぎゅっと
彼を抱きしめていた
戸惑った様子の彼
私のつぶれそうな心を守ってくれた彼
私は嬉しかった

でも
あの子が死んだ不幸はすぐには治らない
私は
彼の胸元で泣き続けた
彼は何も言わず
私を抱きしめ返してくれた

それからの私は
彼を見る目が変わってしまった
前までは頼れる相棒として見ていたのに
今では
狂おしいぐらい愛しい人に見えていた
戦っていても
一人でいても
何をしていても
彼の事を思っていた
彼の仕草が好きになった
彼の戦い方が好きになった
彼のあの背中が好きになった
彼の何気ない所が好きになった
彼の優しい心配りが好きになった
彼のワイルドな服装が好きになった
彼の風になびく短い髪が好きになった
彼の傷だらけの切ない顔が好きになった
気がついた時には彼の全てが好きになった
でも
この思いを伝える事はできなかった
彼が私の思いに応えてくれるかはわからなかったからだ
たとえ伝わったとしても
辛い現実が待っている

いつ死ぬかわからない今
思いを伝えた時にどちらかが死んでしまったら
残された方が辛いに決まっている
だったら
この思いは心の奥にそっとしまっておいた方がいいに決まっている
でも
それが私には辛かった
戦っている時よりも
任務に失敗した時よりもずっと
味方を失った時よりもずっとずっと
私には辛かった
アライアンスとバーテックスの戦いが本格化し
私達は味方部隊が物資を運ぶのを防衛する任務に当たる事になった
私が先行して出撃しようとした時
彼が通信でそっと
こんな事を言ってきた

「ムーム・・・この戦いの後で・・・君に言いたい事がある・・・
だから・・・絶対に死なないでくれ・・・」

私は黙ってうなずき
旧・ナイアー産業区へと向かっていった
その時には
味方の部隊は既に半壊状態であった
敵はＡＣ一機
アライアンス配下のレイブン
ジャウザーだった
私は高速機動からのラッシュで翻弄し
どうにか味方部隊への被害を減らそうとした
しかし

敵の攻撃も激しく
私の機体は限界に達そうとしていた
その時であった
やっと彼が来てくれたのだ
私はすぐに彼の元へ駆けていった
後ろから
ヘブンズレイの凶刃が迫っているとも知らずに
彼からはそれが見えていた為
彼は私に叫んだ

「ムーム！！危ない！！」

彼がとっさに私の機体にぶつかり
私はヘブンズレイの凶刃に討たれる事は避けられた
その代わりに
彼がその凶刃に討たれていた
その時の私は
すぐに彼の元に駆け寄ろうとしたが
彼は近づくなと
私に指示してきた

「・・・すまない・・・どうやら俺は、ここまでのようだ・・・」

彼が
まるで今死ぬような言い方をしてきたので
私は
声にならない声で
彼に呼びかけた
最後の通信で
彼はモニターを使って

今まで見せた事のない
満面の笑顔で
私に言ってきた

「照れくさくて言えなかったが・・・俺は・・・君の事が好きだったんだ・・・だが、それももう叶わないな・・・せめて、君だけでも・・・生き延びてくれ・・・」

私は必死に
彼の名を呼んだ
そして
彼の機体は
私の目の前で大破した
ほぼ零距離にいたジャウザーは
機体の損傷からすぐにその場を離脱していった
私一人だけが
戦場に残った
彼は
私の為に死んだ
私を生かす為に死んだ
信じたくなかった
彼の死を
彼がいなくなった事を
でも
彼はもうこの世にいない
もうどこにもいない
残された私は
一人で泣いた
彼と一緒に写った写真を握り締めて
私は大声で泣いた

私の涙をぬぐってくれる彼は
もういない
私を抱きしめてくれる彼は
もういない
私が愛した彼は
もういない
私を愛してくれた彼は
もういない

アライアンスとバーテックスの戦いも
最終局面になった
彼を失い
部隊のほとんどを失った私は今
バーテックスからの依頼を受理した
内容は
アライアンス戦術部隊の撃退
敵は
ジャウザー
私はまた
彼が死んだ場所へと赴く事になった
私は許さない
私から彼を奪ったあいつを
私から愛を奪ったあいつを
私から未来を奪ったあいつを
待っててね
愛しいあなた
あいつを殺して
私もそこに行くから・・・

ラスト・ラブ　FIN

（後書き）

後書き

・・・駄目だぁ・・・言葉が出ない・・・（；；）

二人を結ばせたかった。だけど、世界はそれを許さなかった・・・

自分でやってて何ですけど、これでリアルにジャウザー嫌いになりかけました。

でもわしは、キャラにそういった感情を抱く事はしません。

もしそうなってしまったら、たちまち話を書けなくなってしまうからです。

恋愛系はこれでも得意分野ですけど、総じて切なくなるのでつい控えてしまいます。

他も見てみたい！！ってのがありましたら、どうぞ感想にてお願いしますねｍ（＿＿）ｍ

零岬さんは、ガルム視点Ｖｅｒを書いていらっしゃるので、そちらもどうぞ。

二人があの世で結ばれる事を信じて、私は書き続けます！！

スペシャルサンクス

ムーム　様

ケルベロス＝ガルム　様

犬ちくしょ・・・ジャウザー　様

名もなきムームの側近

では、このような粗末な駄文をお読みいただき、真にありがとうございました。

ｂｙ　澄田　康美

ＰＳ、スペシャンのジャウザーは、いっその事あのまま続けてやろうかと思いましたけど、一歩前で踏みとどまりました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0911o/

ラスト・ラブ

2010年10月9日23時31分発行